

十勝の遺跡 I

—浦幌町平和遺跡出土の遺物について—

佐藤 訓敏

I

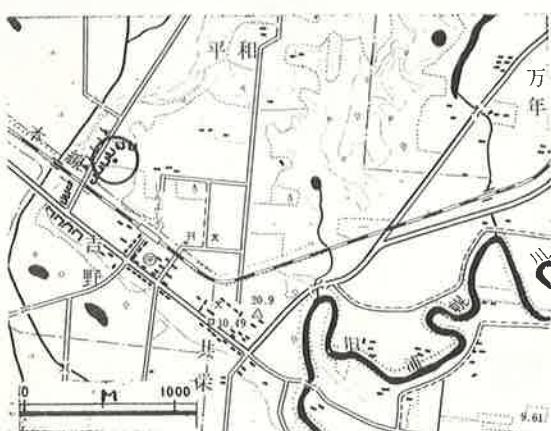
十勝地方における考古学的研究は、いまだ空白地帯で計画的、組織的な研究がなされていないのが現状である。それに付け加え、基礎的資料の報告が稀薄であるのも見のがせない事実である。200余箇所にものぼる数の遺跡が確認なされているにもかかわらず、その内容については明確にはなされていない。(これでは単なる遺跡地名表にすぎない) 単なる自己満足的資料収集なのか。あるいは1片の遺物では何の歴史的な意味をも所持しないのであろうか。これらの点を再認識すると共に新発見資料の集積を望む次第です。

また、私は数年前から十勝川流域を中心にフィールド調査を行なって来た。その間、新たに発見した遺跡も若干あるが、日の目を見ずに煙滅した遺跡も数多く在ると思われる。早急に綿密なる分布調査を実施して行かなければならぬことを強く感ぜられる。

今回は完全に煙滅した浦幌町平和遺跡で採集した資料について紹介し、諸先生方のご助言、ご批判を仰ぎたい。

II

平和遺跡は、十勝郡浦幌町字平和85番地に所在



Map 1 平和遺跡付近地形図

し、大場利夫氏を担当者として昭和42年5月、45年7月、10月に行政発掘調査が実施された。その結果、縄文文化早期を主体とする数多くの遺構、遺物が検出された。(Map 1)

遺跡は、下頃辺川左岸の台地上(標高20m)の南端に立地している。同台地には平和遺跡の外に隣接した位置に下頃辺川吉野遺跡が存在する。むしろこれらは、一括遺跡として把握した方が位置関係からみて妥当性がある。が、今後の遺跡(遺構・遺物)相互の相対的な考究により明確化されることであろう。その他、地点を別にするが吉野台共栄遺跡等10数箇所程、縄文文化早期に比定される遺跡が確認されている。台地全体が一大遺跡のような感を受ける。

III

ここに紹介する資料は、昭和44年5月に同台地より表面採集したものであり、みな土器破片で総数20数片ほどである。

土器破片は、文様構成要素より2類別することが可能である。以下その説明を行なう。(Fig 1)

〈1類〉 1・2・3

1: 口径約30cmの深鉢形と推定される。器壁は8mmを計る。色調は茶褐色を呈している。焼成は良好。胎土に若干小石が混入されている。文様は単節斜行縄文(L R)⁽¹⁾が器面を被覆し、口唇部にも縄文が施行されている。突瘤文は内から外へ形成され、丸い棒状の工具により斜方向から押捺し瘤を表出している。外面には爪形文が突瘤文と同一線上に同一の施文具により構成され左右からの爪形文により上りを造出している。文様構成の順序は、斜行縄文→所謂のI O突瘤文→左右爪形文+もり上りと想定される。

2: 1と同一個体である。口唇部に丸い棒状の工具により小波状を作出している。

3: 胎土(1・2に比して非常に脆い)以外は全て共通するので同一とも推察されるが定かでな

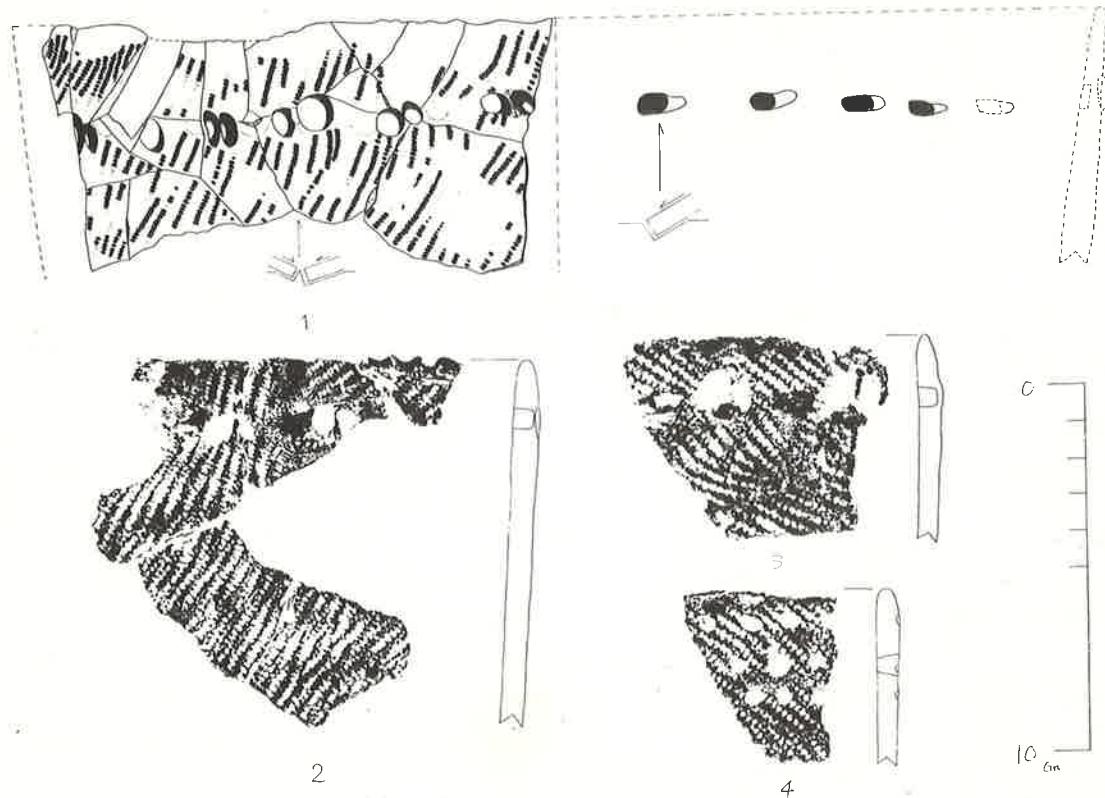


Fig. 1 平和遺跡出土土器片

い。

<2類> 4

4：単節斜行縄文（LR）が施され、口唇部にも縄文が押捺されている。器壁は6mmを計る。色調は黒褐色を呈す。焼成は良好。器の内面に炭化物が付着している。丸い棒状の工具（空間をもつ）を連続して斜方向に円形刺突文を口縁部に平行して3段形成している。2段目には貫通孔を外面より内面に穿孔している。

IV

次に本資料の編年的位置及び分布について若干触れてみたい。

突瘤文+爪形文という一組成なる要素と共に通する要素を他より摘出することにより該時期を位置付けることが可能となる。つまり、突瘤文を主体的文様とする多岐な文様の組み合せをもって該時期と対比できる訳である。

前述の見地より本資料の一組成が、由仁町東三川遺跡の東三川I式土器（縄文晚期最初頭）、あ

るいは阿寒町オンネサルペツ遺跡出土の第II群土器（¹⁰晩期初頭）に、より接近した時期としての類型を求めることができ、その一様相を呈していると類推できる。

だが、野村氏が指摘している如く「…突瘤文土器のみをとり出して編年的位置を決定することはできない。というのは、最近、この土器のグループが全道的に検出されつつあるが、それに伴なう精製土器が、遺跡ごとに多少の変化をみせ、突瘤文を伴なう土器も数型式に分類しなければならない情勢にあるからである」と言うように現段階では、本資料がもつ限界性により完全なる組成（三叉文等の文様要素によりなる精製土器の未確認）を示しえない事は明白である。

以上の観点から本資料は、縄文文化後期終末から晩期初頭にかけて存続した突瘤文粗製土器群の範疇に位置するものとして止めておきたい。

突瘤文+爪形文、あるいは三叉文という要素を道内の遺跡に求めるならば、静内郡静内町御殿山¹¹新冠郡新冠町緑丘¹²、千才市キウス遺物包含地、爾

志郡乙部町三ツ谷貝塚^㉑、千才郡恵庭町西島松南D遺跡A地点^㉒、夕張郡由仁町東三川遺跡^㉓、阿寒町オシネサルベツ遺跡^㉔、釧路市大樂毛第IV地点等^㉕、ほぼ全道的な分布を示すものであることが窺われる

V

以上、僅少量の資料ではあるが、識者の参考となれば幸いとするところである。

末筆ながら、當日頃有益なるご教示を賜わっている明石博志先生、本小報のために紙面の便宜を図って下さった浦幌町郷土博物館の後藤秀彦氏に心から感謝の意を表する次第である。

(1973・1・14 立正大学文学部学生)

引用文献

- ① 大場利夫・明石博志（昭和43年3月）：『浦幌町新吉野平和遺跡調査概報』『北海道考古学』第4輯
- ② 大場利夫・明石博志（昭和43年3月）：『平和遺跡第1集』
- ③ 明石博志（昭和45年3月）：『十勝地方における土器と細石刃を伴なう文化』『北海道考古学』第6輯
- ④ 浦幌高校郷土研究部（昭和45年3月）：『先史遺跡の現状—保護と対策について—浦幌町を探る—その2—』
- ⑤ 浦幌町教育委員会・浦幌町郷土博物館（昭和46年10月）：『浦幌町郷土博物館案内』
- ⑥ 浦幌町教育委員会（昭和46年3月）：『平和遺跡—浦幌町平和遺跡発掘報告書—』
- ⑦ 後藤秀彦（昭和46年12月）：『浦幌町における先史遺跡破壊の現況』『北海道の文化』23
- ⑧ 泉 靖一（昭和34年9月）：『シタコロベで土器を発見した話』『釧路博物館新聞』93
- ⑨ 斎藤米太郎（昭和18年）：『櫛目紋尖底土器を随伴する細石器遺跡』『考古学雑誌』第33巻第7号
- ⑩ 名取武光（昭和30年）：『北海道浦幌村吉野台遺跡』『日本考古学年報』3
- ⑪ 松下 宜（昭和35年1月）：『浦幌式土器の下層に発見された平底土器』『釧路博物館新聞』97
- ⑫ 名取武光（昭和35年）：『浦幌新吉野台細石器遺跡』『北海道文化財シリーズ』第2集
- ⑬ ④⑦と同じ
- ⑭ 山内清男（昭和42年9月）：『斜行縄紋に関する二三の観察』『山内清男・先史考古学論文集』第五冊
- ⑮ 松下 宜（昭和40年）：『北海道の土器にみられる突瘤文について』『物質文化』5
- ⑯ 野村 崇（昭和44年3月）：『由仁町の先史遺跡—由仁町東三川遺跡—』
- ⑰ 岡崎由夫・沢 四郎・富永慶一・高居昌輝（昭和40年3月）：『北海道阿寒町の文化財』2
- ⑱ 野村 崇・宇田川 洋（昭和42年3月）：『長沼町幌内堂林遺跡調査報告』『長沼町の文化財』2
- ⑲ 河野広道・藤本英夫（昭和36年3月）：『御殿山墳墓群について』『考古雑誌』第46巻4号
- ⑳ 藤本英夫・愛下 淳（昭和38年3月）：『新冠郡新冠町字緑丘の墳墓遺跡について』『北海道の文化』特集号
- ㉑ 大場利夫・石川 徹（昭和42年3月）：『千歳遺跡』
- ㉒ 大場利夫・渡辺兼庸（昭和41年3月）：『北海道爾志郡三ツ谷貝塚』『考古学雑誌』第51巻4号
- ㉓ 大場利夫・石川 徹（昭和41年7月）：『恵庭遺跡』
- ㉔ ⑯と同じ
- ㉕ ⑰と同じ
- ㉖ 沢 四郎（昭和44年11月）：『釧路川流域の先史時代』『釧路川—その自然と生活—』
- ㉗ 松下 宜・名取武光（昭和44年5月）：『縄文後期文化—北海道—』『新版考古学講座』3
- ㉘ 竹田輝雄（昭和44年5月）：『縄文晩期文化—北海道—』『新版考古学講座』3